# ズシリと響いた

夕暮　とび子

今回『いんてる』に原稿を寄稿することになり、何を書こうかと思い悩んだ末に、仕事の現場で出会った印象深い同業者のことを記すことにした。

わたしが校正・校閲という仕事を始めたのは、既に三十代になっていた一九八五年の頃のことだからスタートとしては遅いほうだ。それも、今から思うと最初の五年間は、「仕事をしていた」とはとても言えず、ぼちぼち、うろうろとなんとも心もとない状態だった。一カ月の大半が、雑誌の出張校正や単行本の持ち帰りの仕事などで埋まるようになったのは九〇年代に入った頃で、わたしの大好きな日活ニューアクションの映画の中の台詞――ガキも三年経てば三つになる――にならえば、その頃生まれた子供ははや高校生となっている。その十何年間かの中の出会いである。

ある出版社で雑誌の出張校正に行っていたときのこと。進行の人（校閲者）が、わたしになんでもよいから思いついた漢字を言ってみて、と言う。何がなんだかわからなかったが、言われるがままに頭に浮かんだ漢字を口にしたところ、その人は大漢和のある書棚に移動しそのうちの一冊を取り出すやパラパラっとやると、もうその漢字のあるページに行き着いていた。もう驚いたのなんのって。別の漢字でも同じ、どの漢字でも「パラパラ」で、百発百中なのである。わたしなんぞ大漢和を使うときには、熟語だったらまず語彙索引を手にとって〇巻〇ページを確認してから引く。いやいや熟語でなく漢字一字の場合でも熟語が思いつけるようなら語彙索引から引く、という自分でも邪道だなと思うような情けない引き方をしている。

その進行の人が百発百中になるまでどのくらい大漢和を引いたのだろうと思うと頭がくらくらとした。

また、同じ職場には一度読んだ本の（ゲラの）内容はすべて記憶してしまうという噂のある人物もいた。

想像するにポーラ・ゴズリングのミステリに出てくるヒロインのように、一度読んだ文章を映像のように記憶するのだと思った。

一番忘れがたい印象を残し、今わたしがこうやって仕事をしていられるのもその人のお陰と恩義を感じている人物がいる。が、その人には一度も会ったことはない。名前とその人が書く文字と引き出し線を知っているのみ。

その人と出会ったのは、ある人物の評伝の再校に当たったときだった。初校にはもうそれこそ、ありとあらゆることの調べが済んだチェックがついていて、これはいったいどうやって調べたんだ、と驚くようなことまでも調べきっていた。数字も歴史も事実関係も。まだ現在のようにはインターネットが張り巡らされていない頃に。思い切って担当者に聞いてみると、これを調べたのは社員校閲者ではなく、わたしと同じ立場のフリーの人だということだった。思い返せば、その文字や引き出し線には見覚えがあり、過去に何回かわたしはその人と組んで仕事をしていたことに気づいた。以来わたしはその人のように、出来うる限り事実関係のチェックをするようになった。その後もその人が初校で、わたしが再校を担当した本は何冊かあったと思う。その逆のパターンもあったと思うがわたしには分からない。

そうやって何年か過ぎた一昨年、その人が個人的な理由で仕事を辞めたことを知った。ものすごくショックだったし、なにか大きな傘を失ってしまい不安を感じたりもした。

一度も会うことのないままだった。その人の、ゆるい弧を描く独特の引き出し線と、ちょっと丸みを帯びた大き目の文字だけが唯一のつながりだった。

何カ月かしてわたしはその人にお礼を言いたくて電話をした。物言いのはっきりとした方だった。その会話の中の「調べなければなにも分からないでしょう」という言葉がズシリと響いた。